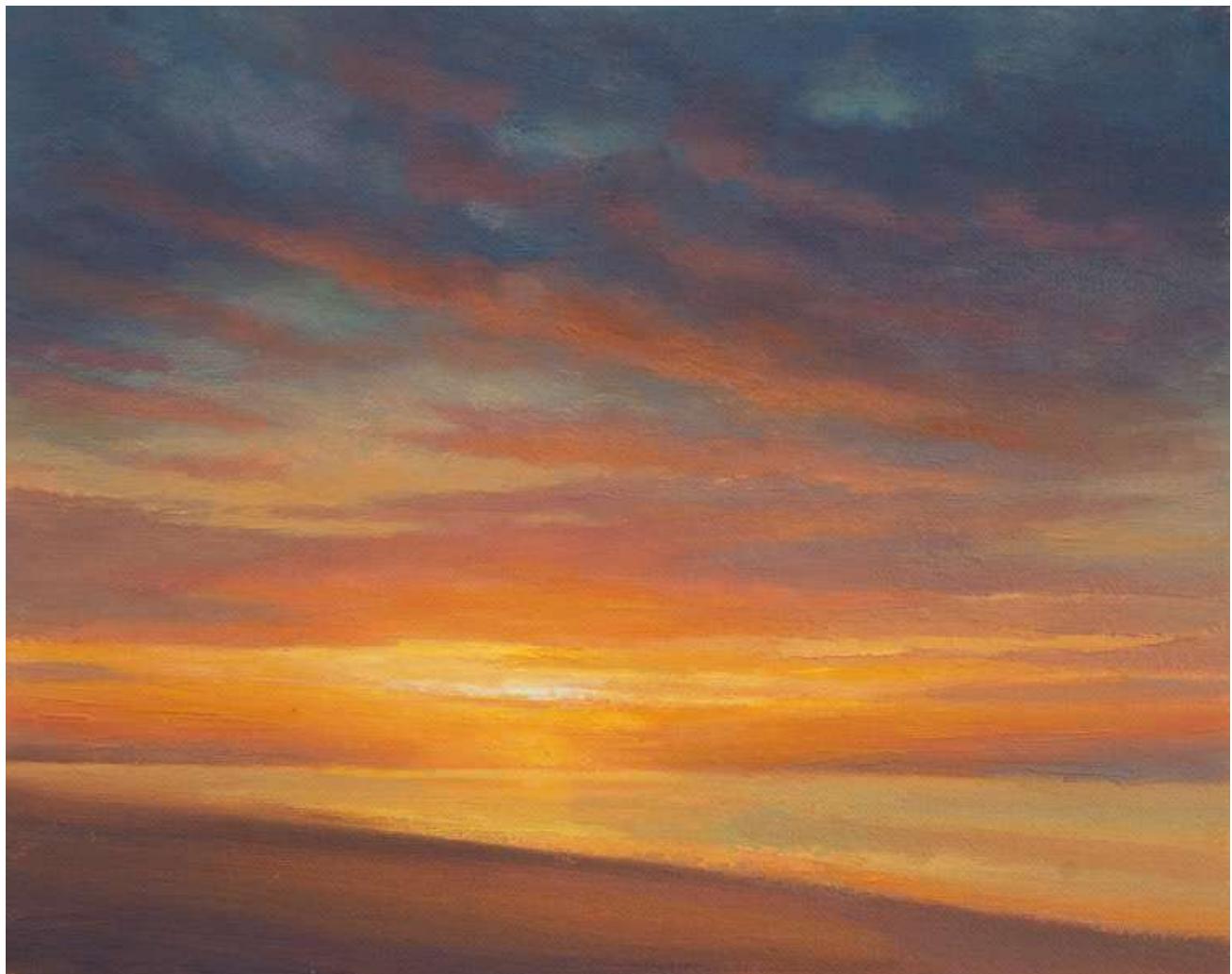

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 76

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1501. 日々を綴り、人生を綴ること
- 1502. 歩いていた自分
- 1503. 自らの人生を自ら綴ることの大切さ
- 1504. MIDIキーボードと欧洲二年目の生活について
- 1505. なぜ日記を書くのだろう？なぜ曲を作るのだろう？
- 1506. 時間帯に応じた文章と音楽
- 1507. 昨夜の夢と音楽と脳
- 1508. フローニンゲン大学での二年目の研究生活の開始
- 1509. 論文創作と作曲の方法論の獲得へ向けて
- 1510. 絶え間ない創作に向けて
- 1511. 時の流れとモーツアルトの楽譜
- 1512. 一億文字の日記の先に
- 1513. 対象をものにするために
- 1514. 「コード分析」「メロディ分析」「主題分析」
- 1515. 創作活動への意志
- 1516. MOOCに関する研究インターンシップ
- 1517. 夢見の意識から夢を見ない意識への移行について
- 1518. 不思議な錯覚と自由自在な作曲の境地に向けて
- 1519. 繙承と伝承
- 1520. 残酷なまでの解放と自由の中にくつろぐこと

1501. 日々を綴り、人生を綴ること

部屋全体に静かなピアノ曲が響き渡る。そんな中で先ほど昼食を摂り終えた。昼食後、書斎に戻ると、机の前に座った瞬間に、先ほどのゼミナールのクラスの内容が思い出された。それほどまでに今日のクラスは、自分にとって意味のあるものであったように思う。

とりわけ今日は、内省実践のトピックに関するやり取りが印象に残っている。その中で、自分の内側にあるものを形として外側に表現していくことの重要性に言及した。内的現象を外側に表現する手段は様々なものがあるが、これまでの日記で紹介していたように、ダ・ヴィンチにせよ、モーツアルトにせよ、ムンクにせよ、彼らは一様に文章を書くことによって絶えず内省実践を行い、絶え間ない内省実践を通じて自らの探究を進めていった。その探究の成果がまさに、彼らの領域における高度な能力とそれが具現化した作品群である。

今日のクラスの中では、文章を書く際に型を習得することの重要性などにも話題が及んだが、それ以上に重要な気づきがあったのでそれを書き留めておきたい。内的現象を外側に表現する際に、誰もができる実践として挙げられるのは日記の執筆ではないかと思う。これはその日に何があったのかを書くよりも、日々の瞬間瞬間に得られる気づきや考えなどを書き留めておくためのもである。

そのため、決して今日何があったのかという外面的な記述で終わるようなものではない。今日という一日の中で何が起きた、そこから自分自身がどのような気づきや発見をしたのか、そしてそうした気づきからまた新たな問いを立てていくということを、文章を書きながらしていくのである。とかく私たちは、体験から成長への一歩を進めたがるが、そうではない。体験を通じて得られた自分なりの気づきや問い合わせから成長への一歩が始まるのである。

つまり、体験を文章として記述することによって、そこから得られた気づきや問い合わせから探究をスタートさせるのである。自己の体験に立脚し、自己の気づきと問い合わせに立脚して歩んでいくことを忘れてしまつては、成長も発達もなしえないだろう。

日々の生活の中で絶えず自分自身を綴っていくということは、「刻成」につながる。刻成とは、刻みながら成るという意味であり、私たちは自己を綴る過程の中で日々の体験を自己に刻み、そこから先に待つさらに成熟した自己へと成っていくのである。

刻みながら成る過程で起こっているのは、まさに「発達(development)」という言葉の語源であるフランス語の“desvolper”が示すように、自己を開いていくということなのだ。日々の体験を自分の中に刻みながら自己を開いていくこと、それが発達の要諦である。そして何より、自分の人生は自分で綴るものではないだろうか。人生は自著の産物である。2017/9/2(土)

No.147: Language Use and Intellectual Level According to Jean Piaget

Jean Piaget argues that human intelligence is determined by the range of actions that a person can perform in the real world. The degree of actions can be evaluated how sophisticated mental operations are. Piaget's assertion is that intellectual levels determine how the person uses language.

Yet, the opposite is not true in terms of Piaget's view. This argument is quite intriguing because almost all of the current developmental assessments are based on the presumption of how a person uses language determines his or her intellectual level. However, Piaget's rationale for this point is still vague to me. Thus, I need to read his books again. Tuesday, 9/5/2017

1502. 歩いていた自分

今朝は五時半に起床し、六時前に今日の仕事を始めた。昨夜気付いていたように、日が暮れるのが早くなり、日が昇るのがいよいよ遅くなっている。

今は辺りはまだ真っ暗闇に包まれている。九月に入ったからだろうか、日の出の時間が遅くなっただけではなく、起床直後の気温が随分と下がっている。どうやら今朝は10度を下回っているようであり、そのために起床直後の室内が寒く感じられたのだ。秋の到来を感じながら、昨夜の夢について振り返っていた。

一昨日に引き続き、昨夜の夢も断片的ながらも、印象的な場面を覚えている。もっとも印象に残っているのは、自分が地元の町を歩いている場面だった。市役所のような建物で用事を済ませた後、私は自宅に戻ろうとした。迎えの車が市内の図書館の駐車場にやってくるとのことであったから、市役所から図書館に向かって歩き始めた。道中、激しい雨が降り始め、私は持っていた折り畳み傘を広げた。突然の雨に対してとっさに傘を広げたのではなく、雨に何滴か打たれた後におもむろに傘を広げたのである。

市役所から図書館に向かうまでの道の中で、一つの坂道に遭遇した。傾斜は激しくない。とても緩やかだ。ただし、この坂道に差し掛かった瞬間、辺りは闇に包まれた。それは本当に真っ暗闇と形容できるほどの闇が支配する世界だった。坂道を行き交う車のライトだけが辺りを照らす唯一の光である。

車の運転手もおそらく私の姿が見えていないだろうから、車にひかれないように気をつけながら、縁石のない白線だけで区切られた歩道を私は歩いていた。車のライトは辺りを照らすというよりも、一点だけを照射しており、私は車にぶつからないことを絶えず意識し、頻繁に後ろを振り返りながら、車が発する黄色く光る丸い点の動きを確認していた。

坂道の途中で車が右折することのできる場所があり、そこを横断する際にとても注意をしていた。車の運転手は歩行者の姿を確認することができないようであったから、車が発する黄色い光の動きだけを目で追いかけながら、タイミングを見計らって右折道を横断する必要があったのである。無事に横断を終え、引き続き真っ暗な世界を歩いていると、ようやく坂道の終着地点に到着した。だが、そこはまだ目的地の図書館ではないため、そこからさらに道を歩き始めた。

この道を歩き始めた頃によく闇が随分と晴れ渡り、視界を確保することができるようになっていた。しかし、それでも辺りは幾分暗く、小雨も降り続いていた。今度の道には縁石があり、さらには歩行者専用の整備された道があったため、先ほどとは打って変わり、随分と安心しながら歩くことができた。

花のない桜の木の下に差し掛かった時、後ろから自転車で三人の友人たちが私に声をかけた。「どこに向かっているのか？」と尋ねられたため、「図書館に向かっている」と私は答えた。すると、一人

の友人が「随分と遠い場所に行くんだね」とつぶやいた。それを聞いた時、市役所から図書館まではてっきり近い距離にあると思っていたことと、どうやら私は歩く方角を間違えており、歩き続けていたにもかかわらず、逆に図書館から離れていたようだったのだ。

少しばかり途方に暮れていると、また別の友人が図書館へ向かう正しい方向を教えてくれた。その友人は携帯のような機器で地図を確認してくれ、「ちょっと遠いけどあっちの方向だよ」と教えてくれた。正直なところ、私はもう歩きたくはないと思った。同時に、愛着のある地元のこの町に対して嫌悪感を一瞬抱いた。

三人の友人は手を振りながらその場を後にした。私は桜の木の下でしばらく静かにたたずんでいた。ここで歩みを止めるのか、それとも遠くにある目的地に向かうのか。何も考えることなく、私はただその場にたたずみながら、右手に見える地元の町の景色を眺めた。その景色が何かを私に伝え、それを受け取った私はもう足が前に出ていた。進むのか、進まないのかを考えることなく、歩いている自分がそこにいたのである。2017/9/3(日)

No.148: The Day Never Comes

Writing is a crucial way to construct robust knowledge networks. In my second year at University of Groningen, I will particularly engage in intentional writing practice to embody what I learn everyday.

Since evidence-based education is a new realm for me, I have an intense motivation to write what I learn through the second-year program. Whenever I come across a new topic that stimulates my interests, I will write down my thoughts. Here, I should avoid writing mere descriptions of the topic.

The key is writing down what I think and feel. Only that kind of writing can lead to embodying new knowledge into my knowledge system. Therefore, all I want to do is write, write, and write. When do I stop writing? Until writing becomes the reverse word “gnitirw.” Because it never happens, I will keep writing forever. Wednesday, 9/6/2017

1503. 自らの人生を自ら綴ることの大切さ

夢から覚め、夢の断片的な記憶を書き留めたところで、少しばかり心を再度落ち着かせていた。あの夢は何を暗示していたのだろうか。とても印象的なのは、夢の中で私は、体験したことのないぐらいの真っ暗闇の世界を歩いていたことである。闇の中に光る、道行く車の黄色く光るライトを忘れることができない。

といえば、夢の中で蛍光灯を持っていないのかどうかを自分で一度確認したことがあった。だが、自分には光を発せられるものなど何もなかった。車の光だけを頼りにし、私は坂道を歩いていた。無事に坂道を登りきったところで友人に出会った時、何だかとても安堵した。久しぶりに彼らの顔を見た時、とても落ち着いた心になったのである。しかし、友人の一人が指摘していたように、私は間違った方向に歩き続けていたのである。

車の光は他者の光。他者の光を頼りに道を進んではならないのか。「自分の光が必要なのだ」という言葉が自然と自分の内側から湧き上がる。真っ暗闇を手探りで進んだことは決して無駄ではなく、むしろ逆にそこで友人たちと出会い、一人の友人の何気ない一言が、自分の光を持つことの大切さを教えたのである。

他者の光を頼りに道を進んではならないのだ。しかし、それを教えてくれるのは他者なのだ。そこから自分自身の光を内側に見出し、その光をこの世界に照らしながら道を進んで行くことが必要なのである。

友人と別れた後、私はしばらくその場にじっとたたずんでいた。何かを考えるのでもなく、何かを迷っているのでもなく、ただその場にじつとしていた。そこから一步足を前に自然と踏み出した時の自分は、おそらくもう自分の内側の光の断片を見つけていたのだと思う。そして、進むのか進まないのかの選択肢と向き合うまでもなく、歩き続けた姿こそが自分の本質を物語っているような気がするのである。

自らの光を持って歩き続けることについて、ここでまた少し考えていた。六時半を迎える、辺りは随分と視界が開けてきた。外の世界が明るくなってきたのと同時に、「人生を綴るということは、人生を呼吸することに他ならない」という一文が突如として立ち現れた。

生きることに辛さを感じる多くの人がいることを知っている。それはもしかすると、呼吸をしていないからなのではないかと思う。自分の人生を呼吸していないのだ。

人は呼吸をしないで生きることはできないと同様に、人生においても、それを自ら綴るという呼吸をしなければ、真に生きることの喜びや充実感を得ることなどできないだろう。

他者に自分の人生を綴られることをやめてみるのはどうだろか。その代わりに、自ら自分の人生を綴るのである。他者が綴った他者の人生を眺めれば、惨めさを感じことがあるかもしれない。また、他者に自分の人生を綴られることは、どれほど息が詰まる事だろうか。

人生は惨めさを感じるためにあるのではなく、窒息するような苦しみを味わうためにあるのでもない。私たちの人生は、各人固有の充実感と幸福感を感じるためにあるのだと思う。そのためには、他者に自分の人生の引導を渡してはならないのではないだろうか。

他者の世界に関与することと他者の世界に依存することは、似て非なるものである。他者への関与を通じて、自分自身の人生を自ら綴る必要があるのではないか。さもなければ、私たちは人生が持つ真の充実感と幸福感を味わうことなどできないと思うのだ。

自分で人生を綴り、自分で呼吸することを私たちは忘れてはならない。2017/9/3(日)

No.149: Writing and Development

The thrust of my inquiries never ceases. A spate of my thoughts and feelings emerges spontaneously and infinitely.

To suppress the explosive creative energy is not desirable. I just write down my thoughts, feelings, senses, and inquiries to give them a form.

Writing is an action itself. It can unfold and awaken me. Since unwrapping is the etymology of development, writing is potent practice to develop us. Wednesday, 9/6/2017

1504. MIDIキーボードと欧洲二年目の生活について

今日も一日があつという間に過ぎ去って行ったという感覚がある。気づけばもう夕食の時間に近づいている。

学術研究と作曲実践の双方にバランス良く従事していると時間が経つのが本当に早い。時間が光のように進んでいく中にあって、その時間の中にいる間はずっと、時間の濃い密度に包まれている。ある特定の対象に没入することは、時間の中に没入することを意味し、時間の密度に梱包されるという感覚を伴う。そんなことを思わせてくれる一日だった。

やはり今日の体験が示唆しているように、学術研究と作曲実践を交互に繰り返す中で、片方の探究に没入する時間が必ず訪れ、その没入が覚めた後にまた別の実践に移行するのが最適なようだ。没入から覚めた後にもその実践に従事しようとすると、没入時に現れる研ぎ澄まされた集中力を発揮することができず、極度に実践効率が低下する。こうしたことからも、一つの実践が没入状態に入った際には、その探究をそのまま走らせ、そこから覚めた時に次の実践に移るのが自分にとっては良いようだ。

一昨日、作曲用に注文していたMIDIキーボードが早々とドイツより届けられた。キーボードが届いた時、まるでクリスマスプレゼントを受け取った子どものように心が高鳴った。早速、商品を開け、キーボードに触れて音を鳴らしてみると、何とも言えない喜びと恍惚感があった。一昨日は、もうその感覚に包まれているだけで幸福であり、長時間にわたってキーボードで音を出していた。

これまで作曲する際には、PCから一つ一つの音符を譜面に置いていくようなことをしており、これだと作業効率が極めて遅かった。そうしたこともあってMIDIキーボードを購入し、実際にキーボードを用いながら譜面に音符を置いていくと、実に快適に作曲を進められることを実感した。

このキーボードのおかげで、音楽理論のMOOCを受講する際にも、実際に手を動かしながら理論を学ぶことができ、学習の質が大きく向上していることを実感する。音楽理論を紙と鉛筆だけで学んでいてはダメであり、やはりキーボードで実際に自分の手を動かして音を生み出しながら学んでいくことが何より重要だということを感じる。

手を動かしながら身体を通じて学習を深めていくことが極めて大切なのだ。これは音楽理論を学ぶ際だけではなく、他の学習にも当然当てはまることがあるのだが、私たちはこのことを忘がちである。概念や理論は身体を通じて掴み、そして咀嚼していくことが大事だということをもう一度思い出しておきたい。

明日からいよいよフローニンゲン大学での二年目のプログラムが開始する。明日はプログラムコーディネーターのマイラ・マスカレノ教授と午後からミーティングがあり、その後に、学習アドバイザーのコビー・エヴァース教授とミーティングがある。二つのミーティングを通じて、二年目にどのようなコースを履修しながら研究を進めていくのかを話し合うことになる。九月からの最初の学期では、三つのコースを履修することすでに計画している。

昨年はこの時期には一つのコースしか履修していなかったため、ある意味自分の関心領域の枠組みから出ることなく、自らの既存の関心に沿った探究を行っていた。今学期は、ある意味自分の関心の枠組みから少し離れる形で探究を進めていく意図もあり、一つの学期でこなせるであろう最大数のコースを履修することにした。

今学期が終わる11月の半ばまでは、基本的に三つのコースで取り上げる専門書と論文だけを繰り返し読むようにしたいと思う。もちろん、週末にはコースと関係のない専門書や論文を自然と読むことになると思うが、少なくとも平日に関してはそれらのコースで取り上げられる文献を深く理解していく試みに従事したい。というのも、最初の学期に履修する三つのコースは、実証的教育学の理論的かつ方法論的な基盤をなすものであるため、集中的に何度も文献を繰り返し読み込んでいきたいと思う。コースで扱われるテキストと論文を繰り返し読む以外の時間は、引き続き作曲実践に充てたいと思う。2017/9/3(日)

No.150: Research Internship at RUG

I had a meeting in the morning for my research internship. I have planed to work for the MOOCs team of University of Groningen.

Last year, I already had two meetings with the director. Now, it is time to elaborate my ideas of what I want to do through this internship opportunity. Of course, my main focus is to analyze and

evaluate the contents of MOOCs, but I want to extend my work. For instance, because I am curious about how to create contents of a MOOC, it would be a precious opportunity to attend a meeting in the MOOCs team for the discussion of course contents.

I wish to hone my research skills and to cultivate my understanding of MOOCs in a comprehensive way. Wednesday, 9/6/2017

1505. なぜ日記を書くのだろう？なぜ曲を作るのだろう？

波の立たない穏やかな大海に、真っ白な一つの綿菓子が浮かんでいるかのようだ。そんな光景が夕方のフローニンゲンの空に広がっている。

夏季休暇の最後の日曜日がもう直ぐ終わろうとしている。この二ヶ月半の休暇は本当にあつという間であった。それでいてこれ以上に充実した夏はこれまでなかったかもしれない。そのようなことを思う。

先ほど夕食を摂りながら、改めて自分がなぜ毎日日記を執筆し、これからなぜ毎日曲を生み出そうとしているのかについて考えていた。結局それは、自分がいかに生きるかということに関わっていた。それよりもむしろ、自分がどのように人生の最後の日を迎えるかということと密接に関係していることがわかったのだ。つまり、いかにこの生を終えていくのかという問題である。

自己の中で不動の想いがあり、それは人生の最後の日、あるいはその日に近づく人生の最後の時期において、自分という一人の人間がこの世界に確かに存在し、生き切ったということを確認して生涯を閉じたいのだ。そのために、毎日自分の人生を綴っているのである。

その日にどのような辛いことがあったとしても、それすらも自分が確かに生きているという実感をもたらすことに他ならない。それは紛れもなく生の実感なのだ。

自分の人生を毎日綴るというのは、自分が確かに生きているという実感を、毎日確認しながら日々の瞬間瞬間を生きて行くことなのだと思う。その日から最後の日を迎えるその瞬間まで、この生の実

感を感じていたいのだ。だから日記を書く。時間の流れを逆にして、人生の最後の日に、これまでの自分が綴ってきた人生の一つ一つの歩みをゆっくりと振り返りたい。

「77年前のあの日に、こんな人と出会い、こんな幸福な思いになった」「34年前のこの日に、あの仕事に取り組んで、なんとも言えない充実感を覚えた」というように、これまでの人生の一つ一つの出来事が肯定的なものであっても否定的なものであっても関係なく、自分という一人の人間が確かに生きていたのだ、という実感の中で自分の人生を振り返りたいと思う。

それを振り返るためには、書き記しておかなければならない。毎日を生の実感とともに進むためにも、そして生涯を閉じる最後の日に、自分が確かに生きていたという最大の生の実感を感じるためにも、毎日を言葉で書き残していく必要がある。

作曲に関しても全く同じである。一日一日の瞬間瞬間に自分を捉えて離さないものを音楽に表現していくことも、根幹にはそれが、自分が確かに生きているという生の実感を得ることにつながっているから大切なのだ。その瞬間瞬間に得た体験がいかに過酷なものであったとしても、喜びに満ち溢れたものであっても構わない。それが自分の人生を綴る上で不可欠な生の実感を引き起こすものであれば、それら全てを曲として残していく。

文字通り全てだ。一つも漏らしてはならない。自分の人生を生きることは、綴ることであり、それは作ることなのだ。

毎日の生の実感を形にするために、私は毎日日記を書き、毎日曲を作りたい。人生を終える最後の日に、自分の人生が綴られた曲を聴きながら、自分の人生が綴られた日記を読みたいという願いがある。2017/9/3(日)

No.151: A Mysterious Symbol in a Dream

I have recently had a dream with the same symbol several times. The symbol is that I suddenly lie down on the ground wherever I am and whatever I am doing at that moment.

I had that dream last night. I thought that it indicated that I might feel physical and mental fatigue in the real world. However, that interpretation is not so true because a sense of fulfillment

overflows from the depth of my psyche everyday. Therefore, the symbol may imply that my vitality is eager to transform itself to create much rigorous vital energy. The energy would help me to engage in my creative work. Thursday, 9/7/2017

1506. 時間帯に応じた文章と音楽

いよいよ今日からフローニンゲン大学での二年目のプログラムが始まる。起床直後の心身の状態はとても爽快であり、目覚めの良い朝となった。ここ数日間は五時半に起床していたが、今日は六時半の起床であり、少しばかり多めの睡眠をとった。起床に合わせて、エドヴァルド・グリーグのヴァイオリンソナタをかけた。

興味深いことに、毎晩寝る前に寝室で聴いているのはとても静かなピアノ曲なのだが、それを早朝に流すことはない。逆に、就寝前に今流れているようなヴァイオリンソナタを流すことはない。その場その時の感情状態は様々に変動するが、一日の中の特定の時間帯は私たちの感情状態を大きく規定するようなのだ。朝は一日の活動に向けた感情状態となり、夜は一日の活動を終えるための感情状態になる。

一日の時間帯ごとに感情状態が異なるため、心地よく聞こえる音が異なるのだろう。ここから思うのは、一日の時間帯に応じて曲を作っていくことは多様な音楽を生み出しうるだろうということだ。時間帯ごとに感情状態が異なるのであれば、そこで生み出される曲も必然的に色彩の異なるものになるだろう。例えば、朝・昼・夜の三回にそれぞれ曲を作つてみるとどうなるかということを試してみたい。

もちろん、今はまだ一日に三曲を作れるほどの技量はないが、今後は一日に一曲ではなく、朝・昼・夜の主要な三つの時間帯に応じて三曲ほど作曲できるようにしたいと思う。時間帯ごとに異なる曲を作るという発想はそもそも、自分が日記を毎日書く時の時間帯に着目したことからもたらされた。

異なる時間帯に日記を書いていると面白いのは、やはりその時間帯に固有の思考や感覚が立ち現れ、それが如実に文章に現れるということである。異なる時間帯に文章を書くという習慣は継続させ、異なる時間帯に作曲することを新たな習慣としたい。

音楽に付随した気づきとして、昨日から音楽理論だけではなく、クラシック音楽に関する歴史や特徴を学ぶことのできるMOOCを受講し始めた。提供先は米国のイェール大学であり、この講座は工夫が凝らされており、飽きることなく引き込まれるように講座を受講することができている。

作曲をする際に、クラシック音楽にまずは範を求めようと考えているため、そもそもクラシック音楽の歴史や特徴はどういったものなのかが気になっていた。音楽には様々なジャンルがある中で、クラシック音楽の位置付けやそれらが他のジャンルの音楽とどのように異なり、どのような影響を与えているのかについて大変興味があったのである。

そうしたことから昨日から、音楽理論のMOOCのみならず、この講座を受講することにした。講座の中で、音楽と脳に関する話題が取り上げられた。その話題をもとに自分の体験を振り返ってみると、音楽と脳に関して興味深い体験を昨日にしていたことに気づいた。

キーボードを用いて作曲をすることと、単純にキーボードから音を出すことに熱中した後に学術研究の仕事に戻ってみると、こうした音楽実践によって脳の異なる部位を使っていたことに気づかされたのだ。

左右の手を用いながら、ピアノ鍵盤という慣れないものを前にし、色々と試行錯誤をしながら音を奏でていくことは、これまで使ったことのない脳の領域を活性化させているようだった。作曲実践は自分がこれまで活用したことのなかった脳の部位を刺激するのみならず、思考空間においてもこれまでとは異なる領域を刺激しているようだった。

つまり、作曲実践を通じて、これまで用いたことのない脳の部位が活性化され、その影響がこれまで用いたことのない思考の領域を刺激しているようなのだ。これは一つ面白い現象であり、今後の作曲実践の中でも度々経験することになるだろう。今後もこれについては観察を続けたい。2017/9/4
(月)

No.152: Classical Music for Me

—Music is what feelings sound like—Victor Hugo

Classical music is timeless. It is beyond time by virtue of the universality it attains.

In parallel with music composition, I learn the history and characteristics of classical music. The more I learn classical music, the more I become captured in the attractiveness of classical music.

Although I can enumerate a number of attraction for classical music, the most salient enticement is that classical music represents human nature and the universe in a profound way.

It is a door for grasping the deep dimensions of the interior and exterior universe. In addition, I respect classical music in that it realistically and metaphysically depicts both Agape and Eros.

Thursday, 9/7/2017

1507. 昨夜の夢と音楽と脳

起床直後、今日の仕事に向けた心身の準備が整ったところで日記を書き始めた。すると、昨夜の夢の内容が自ずと思い出された。

非常に断片的な記憶になりつつあるが、昨夜の夢の中でもまた実家にいる愛犬が登場した。この数ヶ月間で何度か愛犬が現れる夢を見ており、それはこれまであまりなかったことであるからとても不思議だ。

夢の中で、愛犬と私は別々の部屋におり、私は何かに集中して取り組もうとしているようだった。そのため、愛犬が部屋に入つてこないようにガラス扉を閉めていた。すると、愛犬が私の部屋に近寄ってきて、ガラス扉に顔を張り付け、尻尾を振りながらこちらの様子をうかがっている。その様子を見て思わず私は愛犬の方に駆け寄り、床に伏す形で、顔をガラス扉に張り付ける愛犬と同じ高さで自分の顔をガラス扉に張り付けた。

ガラス扉を開けることなく、扉越しに愛犬と意思疎通を行っていたのである。とても暖かく、心休まるような気持ちに包まれながら、次の夢の場面が現れ始めた。

次の夢の場面では、高校時代の友人が何人か現れ、二人一組で担任教師にプレゼンを行っていた。今、二人の女子生徒が担任教師に向けてプレゼンを行っている。内容はいまいち分からないのだが、学校内の何かを改善するための案のようだ。担任教師は部屋の中央の机に腰掛け、厳し

い表情をしている。彼女たちがプレゼンをしている最中も、しきりに厳しいコメントを発している。どうやら、彼女たちのプレゼンで用いられている言葉に迫真性がなく、とても空虚に聞こえるようだ。

実は私のプレゼンはすでに終わっており、最初にプレゼンを行ったのが私だった。二人一組でプレゼンを行うはずなのだが、私は一人でプレゼンを行っていたようだった。担任教師は、今浮かべているような厳しい表情ではなく、私のプレゼンの際にはご満悦な表情を浮かべていた。そこから一転して、今はとても厳しい表情を浮かべながら、二人の女子生徒のプレゼンを酷評している。担任教師からの厳しいフィードバックはその後も続き、終わりを見せることなく夢から覚めた。

今朝のフローニングエンの空は晴れ渡っており、一つ筋の飛行機雲が北から南に真っ直ぐに伸びているのが見える。赤レンガの家々の屋根に朝日が照らされ、レンガ造りの家々のこうした表情はこの時間帯にしか見ることができない。

起床直後にかけていたエドヴァルド・グリーグのヴァイオリンソナタが全て終わり、今度はグリーグのピアノ曲を流すこととした。少しばかりグリーグの曲に耳を傾けていると、昨夜就寝前に別の作曲家のピアノ曲を聴いていた体験を思い出した。

以前に書き留めていたように、脳と音楽の関係性を示唆するような体験だった。昨夜印象的だったのは、高音の音が跳ね上がるような形で奏でられる時、特定の脳の部位が跳ね上がるような感覚がした。最初は少々驚き、少しばかり違和感を引き起こすような感覚であったが、跳ね上がる高音に呼応するかのように、脳の特定部位が跳ね上がる形で刺激されているのは面白い現象であった。

これまで受講していた音楽理論に関するMOOCのコースでは、たびたび耳を鍛錬するような課題が課せられていた。また、購入した音楽理論のテキストにも耳を鍛錬するCDが付属しており、音楽を深く学ぶためには耳を鍛錬する必要があるのだということに気づかされる。今後も耳を鍛錬することを継続させていけば、昨夜のように、ある高音の一音が脳の特定部位を局所的に刺激していることを掴めるだけではなく、一つ一つの音が脳のどこの箇所を刺激しているのかすらも感覚的にわかるようになるような気がしている。

脳内にピアノの鍵盤が立ち現れ、曲の進行によって鍵盤が押される姿を脳内視覚で捉え、そこで奏でられる音が脳のどこの場所を刺激するのかを特定することは十分に可能であろう。

昨夜は、前頭前野の右側の部分が刺激されていた。今後は一つの音をまずは大雑把に、脳の1cm³単位の部位に対応させるようなことを行ってきたい。2017/9/4(月)

No.153: Analysis on Schubert's Piano Works

Franz Schubert, whom I admire from my heart, died quite young. Coincidentally enough, his age when he passed away is my age when I determined to devote myself to music composition.

Today, I received his music scores of his 21 piano sonatas. His prolific composition work always inspires me.

I will respectfully and carefully analyze the chord progressions and melodies of his piano works. Since I am "Schubertian," I want to compose music based on his composition techniques and philosophy of music. Thursday, 9/7/2017

[1508. フローニンゲン大学での二年目の研究生活の開始](#)

今日からいよいよフローニンゲン大学での二年目のプログラムが始まった。自身にとって欧米で取得する三つの目の修士号となるが、このプログラムを終えた後に、一年間ほど客員研究員として米国の大学院に行き、その後フローニンゲン大学か米国その大学院の博士課程に進もうと思う。

今日は午後から、二年目に所属する「実証的教育学」のプログラムコーディネーターを勤めるマイラ・マスカレノ教授とミーティングを行った。マスカレノ教授とはすでにプログラムインタビューの際に顔をあわせており、対面で話すのは今日で二回目になる。前回のミーティング以降も、何度か定期的にメールでやり取りをさせてもらい、マスカレノ教授はとても親しみやすく、さらには知的な印象をいつも私に与える。今日のミーティングでもそれを実感した。

本日のミーティングでは主に、自分の研究を進めるためにどのようなコースを履修していくのかというプログラムデザインと、私の研究テーマに最適なアドバイザーが誰かを話し合った。

ミーティングが始まる前に、一つ驚くべき事実を知った。今回のミーティングの前に、結局自分以外の留学生として、このプログラムに一体何名受け入れられたのかということをマスカレノ教授にメー

ルで尋ねようと思っていた。しかし、直接会った時に聞けばいいことだと思っていたため、それを聞かずにいたのだが、今日のミーティングでマスカレノ教授の方からその点について言及してくれた。結論から述べると、実証的教育プログラムに受け入れられた留学生は私一人だけだった。

今年の春の面接の場で三人の教授と話し、私は有り難いことに全会一致でこのプログラムに受け入れてもらえた。その日の私の面接の前に、三人の教授は英国、米国、中国からの応募者と面接をしていたことを覚えている。

マスカレノ教授曰く、彼らは残念ながら、実証的教育学のプログラムを完遂させるのに必要な統計学の知識がなかつたらしく、全員不合格になったそうだ。私も今から二年前に同じ理由で、つい先日修了した「タレントディベロップメントと創造性」のプログラムに不合格になっている。だが、まさか今回のプログラムに留学生が私一人だけだとは思ってもみなかつた。実際にはもう一人留学生で受け入れられた人物がいたそうなのだが、彼は一身上の理由から今年ではなく、来年に入学することになるそうだ。

三人の教授と面接をした時に、実証的教育学のプログラムは少数精鋭だと聞かされていたが、留学生が自分だけだとは思いもしなかつた。もちろん、フローニンゲン大学には教育学科の中に他のプログラムもあり、その他のプログラムには留学生がいるようである。また、実証的教育学のプログラムにはオランダ人の学生は多数在籍しているため、学習や研究の仲間がいないわけではない。そうした事情を聞いた後に、マスカレノ教授と私の研究テーマについて話をし、どのようなコースを履修しながらこの一年を過ごしていくかを話し合つた。

このプログラムに応募する前から、すでに自分がどのコースを履修して自分の研究を進めていくかを決めていたので、それをマスカレノ教授に伝えるだけよかつた。終始和やかな雰囲気でミーティングを終えた後、実証的教育学に受け入れられたオランダ人の他の学生と共にウェルカミングミーティングに参加した。そこで、面接の際にお世話になったダニー・コストンス教授と久しぶりに再会し、挨拶をした。最初の学期にコストンス教授の「学習理論と教授法」というコースを履修することになつており、来週の月曜日に始まるそのコースはとても楽しみなクラスの一つである。

このウェルカミングミーティングで、偶然にも、二年目の研究のアドバイザーになってもらおうと以前から思っていた、ジャン=ヴィレム・ストレイボス教授にお会いすることができた。ストレイボス教授は、教育テクノロジーやコラボレイティブラーニングを専門としており、特にデジタルラーニングにも精通しているため、私が二年目に行うMOOCの研究について的確な助言を与えてくれるだろうと思っていた。今日は幸いにもストレイボス教授と直接話をすることができたので、簡単に私の研究テーマを紹介し、研究に対していくつか有益な方向性を与えてくれた。正式にアドバイザー契約を結ぶのは少し先だが、今日は口頭でその依頼をしておいた。

昨年の発達心理学科と同様に、教育学科に所属する教授たちは総じて話しがしやすく、昨年に論文アドバイザーを務めてくださったサスキア・クネン教授と同じように、教育学科の何人かの教授と協働研究を今後行いたいと思う。フローニンゲン大学で過ごす二年目の研究生活がとても楽しみだ。2017/9/4(月)

No.154: Succession

Yesterday, I received three music scores consisted of Franz Schubert's piano works. These scores have his unfinished works.

Gazing at them without thinking, I suddenly felt that I succeeded to his will of music composition. His age when he died is the exact same age when I determined to begin music composition. It is not a coincidence, but it must have some meaning. Friday, 9/8/2017

[1509. 論文創作と作曲の方法論の獲得へ向けて](#)

フローニンゲン大学での二年目の二日目が静かに始まった。今朝は五時半に起床し、六時前に一日の仕事を開始させた。

昨日、マイラ・マスカレノ教授やジャン=ヴィレム・ストレイボス教授と会話をして改めて思ったが、非常に優秀な研究者に囲まれて日々の学術研究に打ち込むことができること以上に喜びはない。より正確には、自分の無知さや無能さを絶えず感じさせてくれる環境に身を投じることは、私に大きな喜びをもたらすようなのだ。

二年目のプログラムの前半は履修するコースが多く、さらにはそれぞれのコースで要求されている事柄も高度であるため、腰を据えてそれらと向き合う必要がある。そうしたこともあり、二年目の前半にどこかの国学会に参加する余裕はないかもしれないが、とりあえず自分の関心領域に合致する学会にはどのようなものがあるかを、マスカレノ教授とストレイボス教授に今日の午後に尋ねておこうと思う。その際に、昨年執筆した自分の論文を忘れずにメールに添付するようにしたい。

昨日もマスカレノ教授と話しながら改めて胸に到来した思いは、自分が研究したいことを研究すればいいという非常に単純なものだった。もちろんそれは研究の意義などを一切考慮に入れないという利己的な意味ではない。だが、そもそも自分の内側から湧き上がる強い内発的な動機がなければ研究など進めていくことはできないだろう。今の自分の中には、人間発達の領域においては成人教育に強い関心があり、さらに細かな研究項目で言えば今はMOOCに着目をしている。

さらにもう一つ強い関心事項を挙げるとするならば、楽曲研究だ。これは毎日自分が作曲の実践をする中で、過去の偉大な作曲家が残した作品を科学的な観点から解析をしたいという思いから来ている。今の私はピアノ独奏曲しか作曲しないという考え方を持っているため、研究対象となるのは過去の偉大な作曲家が残したピアノ独奏曲だけとなる。そのため、協奏曲も交響曲も聴くことはあっても、それらを研究対象にすることは当面ない。自分の関心のある対象に焦点を当て、それだけを研究していく。こうした姿勢を持たなければ、研究に真に打ち込むことなどできはしない。

もう少しばかり俯瞰的に研究の方向性を考えてみると、科学的な論文のみならず、やはり哲学的な論文を執筆していきたいという思いがある。主たるテーマは人間発達と教育に関するものになるだろう。ただし、哲学論文を書く下地が今の自分にはまだ構築されておらず、日々日記を執筆する中でこうした下地を確立していくと思っている。

とにかく学術研究にせよ、作曲実践にせよ、自分の内側にほとばしる創作意欲を抑えることなどできない。論文と曲を創るために理論と方法を絶えず学び続けていく。しかもそれは実際に文章を書き、曲を作るというプロセスの中でしていく。文章を書かず、曲を作らないままに論文と作曲の理論と方法など体得しようがない。

今の自分がどれほど未熟であったとしても、醜態を晒しながらでも文章と曲を作り続ける過程の中で、論文創作と作曲の方法論を自らで掴み取っていく。今日もそこに至るためのかけがえのない一日になる。2017/9/5(火)

No.155: Our “Cruel” Freedom

We are always “cruelly” emancipated and liberated from anything. However, we are unfortunate not to feel our cruel freedom because of the nature of this modern society.

The modern society imposes constraints on us that are usually tied with the ideology of capitalism. The culture and systems in the modern world guilefully avert us from our intrinsic emancipation and liberation.

Why don't we discover and relish our cruel freedom? Friday, 9/8/2017

[1510. 絶え間ない創作に向けて](#)

論文創作にせよ、作曲にせよ、何はともあれ、内側から湧き上がる止むに止まれぬ創作意欲は間違いなく不可欠なものだ。こうした絶え間なくほとばしる創造エネルギーがなければ、絶え間なく論文を執筆することや曲を作ることなどできはしないだろう。同時に、こうした内発現象のみならず、やはり内側のものを文章や曲の形にするための方法論も不可欠である。こうした方法論がなければ、創作意欲だけあっても、実際に内側の思考や感覚を表現物として形に残すことができない。

大切なことは、己の中に表現すべき明確な主題があり、それをこの世界に形として残すことであるため、内發的な創作意欲だけあってもダメであり、方法論だけがあってもダメなのだ。どちらも表現物を残すために必要な二極なのだ。

今の私はおそらく、創作に向けた内発衝動が過多であって、それを実際に論文や曲の形にしていくための理論と技術が欠如している。それを自覚する必要があるだろう。しかもそれは、過去の研究者や作曲家が残した理論と技術を徹底的に学ぶことを超えて、自分なりの方法論の確立という次元にまで高めていかなければならない。

他者が苦心して築き上げた理論と技術を徹底的に学ぶことは最低限のことであって、そこから自分の手で方法論を構築していく必要がある。それをしなければ、呼吸をするのと全く変わらずに論文と曲を生み出していくことなどできない。何としても自分が行いたいのは、最後の日まで絶えず絶えず論文と曲を作り出していくことなのだ。呼吸をするよりも自然に、自由に文章と曲を生み出していきたい。それに向けて今日がある。

昨日も作曲理論を学んでいる最中に、その習得プロセスが非常に遅いものであることに気づいたが、もはやそこには焦りのようなものはない。知識や技術が真に自分の内側に構築されていくプロセスは、非常に遅いものなのだ。

昨日もたった一つだけだが有益な理論を学んだ。以前に受講していたシンガポール国立大学の作曲講座のMOOCをもう一度視聴し始め、一つ一つの学習項目をゆっくりと進めている。以前に受講していた時には、音楽理論に関する理解が全く無い状態だったために、何が話されているのか全くわからなかつた。しかし今は、音楽理論に関するある程度の基礎を確立したため、この講座の内容が理解できるようになっている。

この講座はクラシック音楽の作曲のためにあり、内容も非常に実践的なものであるため、絶えず手を動かしながら作曲理論を学ぶことが何より大切である。作曲理論を自分の身体を通じて習得していくこと。そのためには、実際に作曲をするという実践を行うことが不可欠である。

今日は、発達心理学者のハワード・ガードナーが執筆した“*The Quest For Mind* (1973)”を読み、最初の学期に履修するコースの中で最も難易度が高いであろう「評価研究の理論と方法」で課題文献となっている“*Evaluation: A Systematic Approach* (2004)”の二読目を開始したい。特に後者の書籍に関しては、初読時にその概要を把握するような読み方を行っていたため、二読目は、一つ一つの文章を丹念に読み込むということを心がけたい。毎週のクラスの前に丹念な再読を行い、クラスの後に簡単に三読目をする。そして試験前に何度もテキストを読み返すということを行う。こうしたプロセスで、実証的教育学の理論と手法を骨身にしていく。

二冊の書籍を読むことが終われば、いつものように、残りの時間は全て作曲実践に充てる。引き続き、シンガポール国立大学の作曲講座を履修しながら、自らの手を動かすことをもって作曲実践を

していく。画家がデッサンをするように、滑らかに自然と曲が生み出せる次元にまで作曲技術を高めたい。その瞬間瞬間に自分を捉えて離さないものを正確に音として描写していく技術。自然と速やかにかつ滑らかに、あるべき形のものがあるべき姿で音として具現化されるところまで自らの作曲技術を研ぎ澄ませていく。それに向けて今日の仕事と実践がある。2017/9/5(火)

No.156: Philosophy of Education and Evidence-Based Education

It is crucial to provide education based on scientific evidence. That is why I am currently engaging in the field of evidence-based education (EBE).

I cannot doubt the importance of educational practice on the basis of scientific evidence, but I have to be more prudent in implementing EBE into the actual educational practice.

We cannot provide education only with scientific evidence. Educational practice inevitably involves value judgment—normative judgment. In other words, if educational practitioners (e.g., teachers, policy makers, etc) lack sagacious value judgment, the quality of education will dramatically decline.

To enhance the standard of my value judgment on educational practice, I will continue to explore philosophy of education. Friday, 9/8/2017

1511. 時の流れとモーツアルトの楽譜

今日も気付けば早いもので夕方の時刻を迎えた。時に自分がその日に何をしていたのかがわからなくなってしまうほどに、時間が過ぎ去るのが早く感じる。学術研究と作曲実践に今日も取り組んでいると、気付けば一日が終わりに近づいていた、というのが毎日の感覚である。その日に自分が何に取り組み、どのようなことを考えていたのかを書き留めておかなければ、本当に何をしていたのかが分からなくなってしまうほどに、時の流れ中に入り込んでいる。

肯定的な見方としては、日々の活動の全てがある種の没入体験であるがゆえに、時間が過ぎ去るのが早いと捉えることができるだろう。しかし、仮に何も振り返りをせずに没入体験だけを通じて日々

を生きていては、自分の中に刻印されていく何か、あるいは、構築されていく何かを真に実感することはできない。

自分の中に真に知識や経験を構築していくためには、没入体験を消費するのではなく、それを書くことを通じて咀嚼するという行為が不可欠だ。それをしなければ、没入体験の単なる体験主義に陥ってしまうだろう。

今このようにして文章を書いているのは、光よりも早く過ぎ去る時の流れにくさびを打つためであり、そのくさびこそが自分の知識と経験をさらに深めるための拠り所となる。要するに、自分が毎日の要所要所で文章を書き綴っているのは、そうした拠り所をなんとか作ろうとする試みなのだ。

時の流れに従って生きるというのは、その流れの中に自らの存在が体現されたくさびを打ち込み、自分自身の時の流れを生み出すことによって、その流れに後押しされて歩んでいくことなのだ。

今日は午前中にふと、今年の三月に訪れたザルツブルグの記憶が蘇ってきた。想起された記憶はとても具体的であり、モーツアルト博物館を訪れた時に、ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトが幼少期の頃に姉のマリア・アンナ・モーツアルトのために作曲したピアノ曲の自筆の楽譜を購入しようか迷っていた記憶だった。

モーツアルトが幼い時に作曲した曲が自筆で掲載されていることもあり、資料的な価値も非常に高いと思ったのだが、その時は結局購入することはなかった。というのも、当時の私は自分が本格的に作曲実践を行うとは思ってもおらず、そうした楽譜は特に必要ないと考えていたからだ。

今朝突如として、あの楽譜に記載されていた豊富な小作品が気になり始めたのだ。近々ではないが、もしかすると、あの楽譜を現地で購入するために再びザルツブルグを訪れることがあるかもしれない。夕日が沈みゆくフローニンゲンの空を眺めながら、そのようなことをふと思った。2017/9/5
(火)

No.157: Egregious Liars in Our Society

Modern people are egregious liars. They deceive themselves not to live their own life. Instead, they are living a deceptive and artificial life constructed by the ideology in the modern world.

The modern education completely collapses in that it deviates its fundamental purpose; that is to emancipate and liberate us.

How many people discover their inner voices and express them to deeply participate in our society? I think that one of the most important purposes of education is to enable and encourage us to do so. Friday, 9/8/2017

1512. 一億文字の日記の先に

ここ数日間、文章を毎日書くことの意義、狭義には日記を日々の瞬間瞬間に書き留めておく意義を何度も考えるようなことがある。今朝読み終えた、発達心理学者のハワード・ガードナーの書籍の内容の中で、とりわけ印象に残っているのは、ピアジェが絶えず書く人だったということだ。

過去から現在に遡ってピアジェの仕事を研究している学者を挙げれば切りがないだろうが、ピアジェ研究に携わる者であったとしても読み切れないほどの膨大な論文をピアジェは生涯にわたって書き残している。この世界で誰もピアジェの論文を全て読んだ人がいないぐらいに、ピアジェは絶えず文章を書く人だったのだ。

ピアジェは一日の間に散歩を楽しむ時間を設けており、散歩から帰ると、散歩の最中に湧き上がった考えを絶えず「学術日記」のようなものに書き留めておいたそうだ。そして、学術日記に書き留められたアイデアを元に、論文を次から次に大量に執筆していった。

ガードナーの書籍を読みながら、改めてピアジェが主題とした、知識の構成過程に関して考えてみると、ピアジェはまさに自身の発達思想を体現するかのように、自分の内側に知識体系を築き上げていったのである。ピアジェにとって、まさにその手段が書くことだったのだ。

絶えず書くことによって、自分の思考を常に更新していたのである。実際に、ピアジェは出版した論文の中で展開した自らの考えを、次の論文以降から絶えず更新することを行っていた。

私たちの知性というのは、既存の知識と経験を出発点とし、絶えずそれらに自己言及しながら発達していく。つまり、知性の発達には自己の歴史に言及するという特性があり、書くという実踞性行為は自己言及作用を持っているがゆえに、知性の発達を促進していく効果があるのかもしれない。

ピアジェが日々の研究活動を逐一文章として書き留めていたことと同じことを、より一層意識的に自分も行っていく。私は日記には様々な役割を持たせているが、一つの核として、ピアジェと同様に「学術日記」という役割を与える。

ピアジェの文章執筆実践について考えていると、ふと、毎朝の自分の習慣をもう一度俯瞰的に捉えることになった。起床直後に日記を執筆することはすでに確固とした習慣になっていたのだが、それだけではなく、以前の日記を読み返すという行為も早朝に行っていることに気づいた。これもまた、自己を再構成させながら深めていくことに不可欠な習慣だと思う。日記を絶えず書くだけではなく、過去の日記の一部を毎朝読み返すことは自己言及実踞性に他ならない。

絶えず日記を書いていく実踞性は、既存の自己から新たな自己を絶え間なく生み出していくという自己創出的な側面が強い。一方、過去の日記を読み返すという実踞性は、既存の自己を構成する過去の自己を振り返ることに他ならず、それは当時の自分と今の自分との差異を必然的に認識させることを促し、気づいた差異がまた自己創出運動に寄与するのだ。

ここで私は、単に日記を絶えず執筆するだけではなく、やはり過去の日記を読み返し、歴史的自己を確認する作業を行うことによって、さらに自己創出運動が促進していくのではないかと思うようになった。これは自らの体験を振り返ってみた時に、確信を持って言えることである。

気付かない間に、この一年間で180万字ほどの日記を書いていた。絶えず書くことを通じて生きるという熱情を持っている割には非常に少ない文字量である。だが、それした微々たる分量であったとしても、確かに自分は毎日日記を書いてきたという体験が積み重なり、それは思いもよらないような気づきを毎日私にもたらしてくれる。

人は一億文字日記を書き留めた時、何が見え、それでも何が見えないのかに異常な関心がある。

昨年の夏、ドイツのリアーからハノーファーへと向かう列車の車窓から古城を見た時、少なくとも一億文字の日記を書き残そとふと思ったことが思い出された。あの時の私は、一億文字の日記を書くということを想像しただけで、絵も言わぬ恍惚感に包まれ、自己の存在が溶けてしまいそうになっていた。その感覚は今でも残っており、一億文字の日記を書くことを今想像してみても、同様の感覚が全身を駆け巡る。自分は一億文字の日記を書いた時、何が見え、何が見えるのだろうか。何が分かり、何が分からないままなのだろうか。見えるということや見えないということ、分かるということや分からぬということを越えることができるだろうか。2017/9/5(火)

No.158: Dream of Overcoming Tiny Ego

The feelings of a dream that I had last night still remains within me. I smashed an authority in the dream. More specifically, I smashed his tiny Ego into pieces.

What I did next was to burn away the pieces of his Ego by the flame of my sense of justice.

Reflecting upon the dream, I realized that I broke into pieces not only the authority's paltry Ego but also mine. It implies that I am still walking on a path to overcoming my meagre Ego. Saturday, 9/9/2017

1513. 対象をものにするために

昨日の夜から、フローニンゲン大学での二年目の最初の学期に履修するコースで取り扱われる専門書や論文に絞って探究を進めることにした。

いかんせん最初の学期に履修するコースの内容が未知なものが多くいため、これまでの自分の専門領域をさらに深めるような試みに着手するのではなく、手持ちの専門書や論文を読むことを意識的に控え、とにかくコースで取り上げられる内容に集中したい。

今学期のコースの内容をものにできるかどうかが、今年の後半から着手する新たな研究の質に大きな影響を与えるだろう。今、何気なしに「ものにする」という言葉を使ったが、ある対象に関する知識や技術が真にものになるというのはそれほど簡単なことではない。

何かがものになるというのは、自己そのものがその対象になる必要があるのだ。言い換えると、自己が存在の深層からある対象を掴み、文字どおり、自己が「もの」そのものにならないといけないのである。

対象に関する知識や技術を真に所有するというのは、それほどまでに難しいことなのだ。自己がものそのものとなり、対象をものにするためには、昨日の日記で書いていたように、文章を書くということは一つ鍵を握る実践になるだろう。

とにかく、ものになるまで文章を書くのである。そして、ものになっても書き続けることによって、その知識や技術は確かなものとなっていく。

ある対象に関する知識や技術がものになったとしても書き続ける必要があるのは、ものそのものが変容し続けるからであり、そして自己そのものが変容し続けるからである。そのため、ある対象に関する知識と技術をものにするというプロセスは、実質的には終わりがない。

今の自分に当てはめてみると、実証的教育学(エビデンスベースト・エデュケーション)の理論と手法について絶えず文章を書くということを自らに課したい。実際にはこれを自らに課す必要がないほどに、それを自発的に行う自分がいるだろう。しかしあえて、その必要性をもう一度自分で書くことは、その実践に自己をより深く関与させてくれるだろう。

今学期に履修するコースは、「評価研究の理論と方法」「学習理論と教授法」「実証的教育学」の三つであり、すでに「評価研究の理論と方法」のコースで取り上げられる課題文献は全て一読をした。残りの二つのコースに関してはまだシラバスが完成していないようであり、コースで取り上げられる論文を読み始めるのは今週末からになるだろう。いずれにせよ、課題文献を読むときのポイントは、記述内容をこれまでの自分の知識と経験に絶えず引きつけながら読むということであり、そこからさらに一步先に進めて、自分の関心を引いた箇所と新たな知識項目を自分の言葉で文章として残しておくことである。

おそらく日本語でそれを行うよりも英語で行う方が容易であり、なおかつその方が自分の内側で知識をより血肉化することにつながるであろうため、英文日記を通じて文献に関する文章を書き留めておきたい。専門書であれば各章を読むごとに文章にまとめるか、あるいはトピックごとにまとめて

いくかという方法をとりたい。トピックの数は豊富ではあるが、全体を読んだ後に文章を書こうすると、結局自分の既存の枠組みを通じて特定のトピックだけを抜き出してしまいそうなので、当面はトピックごとに文章を書き残していく。

とにかく書くということを通じて、自分の内側に新しい知識体系を構築していくことを行いたい。二年目の最初の学期では特にその点を強く意識していく。2017/9/6(水)

No.159: Towards My Unique Style of Music Composition

It is cold in the morning, and I think I need to turn on a heater. Yet, it might be too early to turn it on because it is still September.

Yesterday, I composed a small piece of music—8 measures—whose title was “My Heart to Schubert on a Rainy Day.” After I composed this piece, I thought that I became gradually able to apply knowledge and skill of composition to my work.

I could catch a glimpse of the progress of my music composition. I will continue to cultivate the fundamental knowledge and skill of music composition.

Today's practice will be a small but indispensable step to establishing my unique style of music composition. Saturday, 9/9/2017

[1514.「コード分析」「メロディ分析」「主題分析」](#)

あいにく今日からしばらくの間は雨の日が続きそうだ。天気予報を確認すると、来週の半ばまで雨の日が続くことを示している。もちろん、一日中雨が降り続けることはここでは滅多にないことだが、一日のどこかで雨が降る日がこうも長く続くというのは、夏から秋に向かた季節の変化を示しているように思えて仕方ない。新しい季節に向けて、季節がそれそのものを脱皮させるために雨を降らせているかのようだ。夏という季節が脱皮されれば秋がやってくる。

北欧旅行を通じて、絵画や音楽に対する向き合い方がまた静かに変化したように思う。一つは、芸術作品というものが一体どういった性質を持つものなのかということに関係している。これまでの私

は、画家の描いた絵画や作曲家が作った音楽が芸術作品なのだと思っていたが、これほど浅薄な思い込みは他にないだろう。芸術家が作り上げた表現物が芸術作品なのではなく、彼らの生き様そのものが芸術作品なのだ。そのことに気づかせてくれたのが、デンマークとノルウェーで訪れた数々の美術館と博物館であり、とりわけ作曲家のエドヴァルド・グリーグと画家のエドヴァルド・ムンクからそれを学んだ。

芸術鑑賞というのは、作品だけを見ていてはならないのである。作品の背後にある、作り手の人生そのものを見なければ、真に重要なことは見えてこないということを、とりわけそれら二人の芸術家から痛切に教えられた。芸術作品の作り手の人生そのものを理解する試みとして、私が行っていたのは、芸術家が書き残した日記や手紙を読むということだった。

彼らが作品だけではなく、作品を取り巻く出来事や当時の自分自身と自己を取り巻く社会環境についての文章を書き留めてくれていたおかげで、作品に対する理解が大きく深まる貴重な体験をした。グリーグやムンクが残した日記や手紙は、彼らの生き様を捉える貴重な資料であり、それらは彼らの作品に対する理解をさらに深めることにつながる。

というよりもむしろ、彼らの生き様そのものが芸術作品であるのなら、彼らが残した日記や手紙も立派な芸術作品だという認識を持った方がいいだろう。そういう気持ちを持って様々な芸術家の書いた文章と向き合っていきたい。とりわけ現在注目をしているのは、バッハ、モーツアルト、ベートーヴェン、シューベルト、ショパンが書き残した日記や手紙である。彼らの作品を深く理解し、自らの作曲実践に活かしていくためには、いつか必ず彼らの書き残した文章を読む必要がある。

それは避けて通ることのできないものだ。偉大な作曲家の曲を構造的に分析するだけでは足りず、彼らが書いた文章を読み解くことによって、真に彼らの音楽世界を理解することにつながり、それが自分の作曲実践に滲み出ることになるだろう。

今、日記や手紙を通じて、偉大な作曲家の音楽世界の真髄を把握していく重要性を書き留めたが、もちろん構造分析を進めていくことは自分の作曲実践に不可欠である。同時並行にそれら二つに従事することができれば理想だが、今の私の状況から考えると、最初に行うべきは楽曲分析だろう。

昨日少しばかり考えていたのは、どの観点から楽曲分析を進めていくかということである。分析対象になるのは、何はともあれ、自分を捉えて離さない曲であり、自分の関心を強く引く曲だけとしたい。

彼らが残したピアノ曲を全て分析することができれば理想的だが、まずは優先順位を設けて分析を進めていく。その時に観点としては、コード分析とメロディ分析から始めるのが良いのではないかと思った。とりわけ前者に関しては、今履修しているシンガポール国立大学のMOOCを通じてすでにやっており、コード分析の理解と手法を磨きながら今後も継続させていきたい。その講座の教授曰く、コードの模倣は違反ではないため、優れた楽曲のコード進行を掴み、それを自分の作曲に活用していきたいと思う。

それではメロディ分析はどのように行えばいいのだろうか？という疑問にぶつかった。今のところ、その理論と方法を持っておらず、これはどのようにしていくのがいいのかまだ見当がつかない。ただし、間違いなく、自分の何らかの内的基準が良いメロディとそうではないものを聞き分けているのは確かであるため、その内的基準が何かを明らかにすれば、自ずとメロディ分析の方法論が見えてくるだろう。

これについては、自分の内的基準を見直しながら、なおかつ既存の方法にはどういったものがものがあるのかを調査しておきたい。また、メロディ分析に合わせて、「主題分析」のようなものも合わせて行いたい。これは曲全体に対してよりも、複数の小節を聴いた時に自分の内側に湧き上がる感情や感覚を言葉にしておくことを意味する。

曲の随所随所には、特徴的な感情や感覚を引き起こされることがしばしばあるため、それを曖昧なままにせず、言葉の形に残しておくのである。例えば、「陰鬱な気分」「清朗感」「形而上学的認識世界」などという形で、複数の小節が喚起するものに言葉を与えていく。

要約すると、「コード分析」「メロディ分析」「主題分析」を既存の方法を活用するだけではなく、自分なりの方法で進めていくことを行っていく。こうした分析を行っていけば、徐々に自分の作曲実践が自然と形を生み出していくだろう。2017/9/6(水)

No.160: Irony in the Modern World

Do we forget that we are inherently emancipated and liberated from anything, don't we? When did we forget our intrinsic nature of freedom?

The moment that the word of freedom emerged is ironical. Our language has an innate capability to draw a borderline between the object that we describe and the others. This inherent nature of language is beneficial to clarify our views to see the reality, but at the same time, it inevitably brings about a slight dichotomy between an object and the others.

The moment that we coined the term of freedom indicates that we conceived non-freedom. Since we set a contraposition against freedom, we have been confined in a jail of non-freedom. It is ironic that we began being imprisoned in the world saturated with non-freedom when we coined the term of freedom.

We have to notice such a condition in the modern world in order to restore our authentic nature; that is liberation. Saturday, 9/9/2017

1515. 創作活動への意志

朝食を摂りながら自分の創作活動について考えていると、どうやら自己の中で理想としている作品創出リズムがあることがわかった。これまで具体的な数字として明示したことはなかったが、どうやら自分は、一日の三つの時間帯区分ごとに日記と曲を書き、一週間に一本のペースで査読付き論文を執筆したいようなのだ。つまり、一日に三つの日記を書き記し、三つの曲を作り、一週間に一つの論文を生み出していきたいという理想があるようだ。

現状は、日記に関してしかその理想的姿を実現させていない。一見すると、一日に三曲作ることや一週間に一本の論文を執筆していくことは異常のように思えるかもしれないが、それは全くの誤解だろう。むしろ、仮に私たちが本当に自己の創造エネルギーとつながることができたら、そうした姿は正常すぎるほどに正常だと私は思う。自己の内側から絶えずほとばしるものに形を与えようとする純粋な行為を行えば、そのような数の曲や論文は自然と生み出されるように思うのだ。

今の私は、それができていないことをここでもう一度考える必要がある。自分の内側には表現を待つ物で溢れかえっているのは確かなのだ。それを曲や論文の形にする理論や方法に習熟しておらず、自分なりの方法論を確立できていないことが問題なのだ。今はまだそうした方法論を確立する時期にある。

自分の中での爆発の時期はもう少し先だ。爆発的な創作活動に全てを委ね、自己が創作活動に完全に溶解する形で進行する生活。文章を書くことだけ、作曲だけをする生活。こうした創作活動だけに従事するという、極端な生活の実現に向けてこれから準備の日々を過ごしていく。論文を執筆する自分なりの型と曲を生み出す自分なりの方法を習得するには、もうしばらくの修練が必要だ。

創作活動だけに従事するように生きるべきであり、その実現に向けて日々を生きるべきだという意志。慣習的な規範に従う形での「べき法則」ではなく、内的絶対基準に基づく「べき法則」に従って生きて行く毎日。

他者の命を奪ってはならないという命題と全く同じように、創作活動だけに従事しなければならないという単純明快な生き方の指針。

日々の探究と実践の中で、文章執筆と作曲の型を獲得していくながらも、思考や感覚を縛る制約を外し、開放的に表現する意思を育むことも忘れないようとする。2017/9/6(水)

No.161: Our Nature and Our Language

Ralph Waldo Emerson mentions that the corruption of humans is followed by the corruption of language. The premise would be that our language is closely connected with our nature.

As Charles Sanders Peirce asserts, our beings and our language are reciprocally educated. The depth and sophistication of our language are prerequisite for our development. However, we have to remember that our development and the development of our language have multi causality.

Our language develops when our development occurs, whereas our development emerges when our language develops. Once our language corrupts, it means not only that our development is stagnant but also that our humanity deteriorates. Saturday, 9/9/2017

1516. MOOCに関する研究インターンシップ

天気がぐずつく午前中に自宅を出発し、二年目の実証的教育学のプログラムで要求されている、研究インターンシップに関するミーティングに参加した。インターンのコーディネーター二人と私の三人で、今回のプログラムの後半で要となる、研究インターンシップに関してあれこれと打ち合わせを行った。

以前に書き留めていたように、私は今回の機会を利用して、フローニンゲン大学が提供するMOOCについて研究インターンシップを行おうと思っている。

ちょうど今から半年前に、フローニンゲン大学のMOOCを統括しているジャン・フォルカート・ディエナム教授と二回ほどミーティングを行い、その時にインターンシップの許可を得ることができた。来年の二月からのセメスターにおいて、本格的にMOOCに関する研究論文を執筆することになるが、それに合わせて今回の研究インターンシップを行いたいと思っていた。

今回のインターンシップを行う過程の中で、自分の研究に活用できるデータを集積することによって、研究をよりスムーズに進めて行こうという算段があった。確かに私の関心は、MOOCのコンテンツ分析にあるが、それだけを行ってインターンシップの期間を過ごすのは勿体ない。

インターン・コーディネーターからも助言があったように、一人で行う分析作業だけに従事するのではなく、そのチームや組織に多角的に深く関わるようにしたいと思う。MOOCの講座を一つ世界に提供する際には、そこに関与する関係者は様々である。こうした様々な関係者がどのように協働作業を進め、一つの講座を作り上げていくのかというところにまで踏み込んで理解をしていきたいと思う。そのため、次回ディエナム教授とミーティングをする際には、MOOCの企画からコンテンツ作り、そして最終的なプログラム評価という一連の流れに関わらせてもらえるようにお願いしたい。

ただし、インターンの期間はとても限られたものであるため、プロセスの全てを見ることはできないかかもしれない。インターンの公式な開始時期は次のセメスターからであるが、開始の時期は受け入れ先の組織と自分の都合によって変えることができるそうだ。例えば、次の学期から週に一日ほどMOOCチームのオフィスでインターンすることによって、早めにデータを集めたり、関係者とのネットワークを徐々に作ろうと思った。

しかし、今学期と来学期で構成される最初のセメスターは、履修しているコースの数と質においてかなり負担が大きいため、やはり公式な開始時期にインターンを始めることが良さそうだと判断した。その場合は、週に二日ほどオフィスに通うことになる。組織の中で働くことは久しぶりであるため、それは密かな楽しみである。

この研究インターンシップを通じて、MOOCの現場を理解した上で、実証的な研究を行っていく。その経験が、来年の米国での客員研究員としての道を開くだろう。2017/9/6(水)

No.162: A Necessary Distance from My Work

It seems that today is Sunday. I have recently forgotten what day it is today.

My sense of time has often collapsed. My daily life meticulously and systematically proceeds everyday. Yet, that is not mechanistic but organic.

My daily life is imbued with academic work and music composition; both are indispensable to my life. However, I thought it would be better for me to take a distance from academic work just today.

I imagined that the distance could create ample space so that I can explore my subjects more deeply after I come back to my work. I will experiment it so as to cultivate my academic work, although being away from academic work for just one day tortures me very much. Sunday,
9/10/2017

1517. 夢見の意識から夢を見ない意識への移行について

昨日から、「評価研究の理論と手法」のコースでとりあげられる“Evaluation: A Systematic Approach (2004)”の二読目に入った。第一章から第三章までのおよそ100ページを精読していった。初読時に大枠を掴んでいたおかげもあり、今回の再読時には、本書の内容が頭により入りやすくなっていた。

学習内容を忘却することや学習内容を理解できないというのは学習に常に付きまとことであり、それを心配する必要はない。必要なことは、そうした退行や停滞を所与のものとみなし、学習内容を自分に引き寄せながら繰り返し接していくことである。一度にペンキを緻密に塗ろうとするのではなく、最初は大まかにペンキを塗り、二回目、三回目と続けてペンキを塗る中で、徐々に精度を上げていけばいいのである。

このテキストは、教育政策や教育プログラムの評価を含め、企業の人財育成プログラムの評価にも有益な内容を持っており、今私が携わっている仕事とも直接関係している。発達心理学の領域を離れ、教育学や社会学的な観点から個人や社会の発達を考える機会がここ最近増えてきており、自分の専門領域が徐々に拡張してきていることを感じる。既存の知識基盤をより強固なものにすることに加え、新たな知識基盤を確立しながら知識領域を拡張させていくような姿が見える。今日は本書の第四章から第六章までの再読を行いたい。

チェコの作曲家ベドルジハ・スマタナのピアノ曲を早朝から聴いている。早朝の六時に起床し、その20分後から今日の仕事を開始した。辺りはまだ闇に包まれており、雨雲の向こう側に、少しばかり闇のない深い青色の空が黒々と浮かんでいる。

昨夜は印象深い夢を見た。おそらくこの一ヶ月間ぐらいだろうか、何度か自分が疲労困憊でその場に倒れ、深い睡眠に入るという夢を見てきた。昨夜もその夢だった。

実際に私が通っていた中学校の体育館で、全校生徒が合唱を行っており、その中に私もいた。前後左右には私の旧友ばかりであり、どこか懐かしいような感じがしていた。

合唱が後半に差し掛かった頃、自分がその場に立っていられないような疲労感が突然襲ってきた。しかし、その場に即座に倒れ込むのではなく、私は前後左右の友人の顔をもう一度確認していた。その後、ゆっくりと身体を崩し、床に突っ伏して深い休息に入ることにした。

周りから見れば、それは突然の出来事であり、自分が床に伏したことを一大事だとみなしていたようだが、床に伏した私は周囲をそれほど気にすることなく、とにかく深い休息が自分には必要なのだということを強く自覚しているようだった。

たった今、この夢について文章を書き留めた瞬間に、「ああ、それは夢を見る意識から夢を見ない深い意識への移行を示す象徴的なシンボルなのだ」という言葉が漏れた。

確かに昨日は、学術研究と作曲実践の双方に打ち込み、就寝前に少しばかり探究に従事し過ぎたような感覚があったが、それを抑制し、休息を自己に促すシンボルというよりも、サトルの意識状態からコーヴィルの意識状態に移行することを示唆するシンボルとして床に伏すという行為が現れたようと思える。

日々の学術研究と作曲実践の充実感を思えば、それらに従事することがある種の休息である自分にとって、昨夜の夢のシンボルは深い意識状態への移行のサインであると解釈をした方が説得力がある。この解釈によって、私は夢を見る意識から夢を見ない深い意識へ移行するその瞬間を捉えることができるようになったと言える。

コペンハーゲンを訪れた初日に初めてこの種の夢を見たが、その時の解釈は、覚醒意識の自己が疲労困憊するためにそうした夢を見たのだ、というものだった。一歩譲って、身体的な疲労感があの時の自分にあったとしても、精神的な疲労感は全くなく、むしろ私の精神は充実感で満たされていた。

おそらく、精神が充実感ではち切れそうになる時に、このシンボルが出現するのかもしれない。充実感を入れる既存の箱から充実感がこぼれ落ちそうになる時、その箱を解体し、変容させるためにあのシンボルが立ち現れるのだろう。夢を見ない深い眠りの世界。そこは心身の深い回復と充足をもたらす場所であり、新たな自己を創造する深淵な場所である。2017/9/7(木)

No.163: A Dream Has a Dream

I had a dream last night, and I thought that who else had the same dream last night in this world.

We often hear that one person shares the same vision with another person. Does the same phenomenon happen to our dreams?

It may be possible to imagine that someone else in this world has the same dream or somebody in the past had the same dream with ours.

By the way, do we really have a dream? What if our dream has a dream? It sounds preposterous, but the subject having a dream may not be us but something else…it might be a dream itself.

Sunday, 9/10/2017

1518. 不思議な錯覚と自由自在な作曲の境地に向けて

今朝のフローニングンは肌寒く、室内にいても足元から冷える。まだ九月に入ったばかりだというのに、今朝は暖房をつけてもいいぐらいの寒さである。

起床直後に空を覆っていた黒々とした雨雲は姿を消し、今は晴れ間が広がり始めている。今日は午前中に集中的に文献を読み、午後からは大学のキャンパスに足を運び、25本ほど必要な論文を印刷する。

毎日昼食を摂ってから一時間ほど経った後に20分ほどの仮眠を取るようにしている。仮眠の時間も仮眠中の姿勢もいつも全く同じであり、この習慣が長年続いている。昨日の昼、昼食後に仮眠を取っている最中に不思議な体験をした。意識が夢を見ない深い意識状態に落ちていき、15分ほど経った頃に再び意識が戻ったというものである。その時に、「朝が来た」と思った。実際には、意識が戻った時刻は午後の時間帯なのだが、なぜか私は時間感覚を混同しており、朝が来たと錯覚していたのだ。

とてもたわいのない現象なのだが、なぜだかそれがすごく興味深い体験として自分に知覚された。思うに、夢を見ない深い意識状態に短いながらでも参入することができれば、そこでは深い体験が

自分の気づかないところで起こっているのではないか。例えば、身体や精神の治癒や変容などである。

昨日もたった20分の間に、そうした意識状態に参入することができ、それが自分に深い治癒をもたらしていたようなのだ。そのため、わずか20分—実際には15分—の時間が、普段の七時間半ほどの睡眠と同等のものに感じられたのだ。だから私は朝が来たと錯覚したのだろう。

昨日も試行錯誤をしながら作曲実践を行っていた。この試行錯誤の過程が学習には大事であり、自分の頭と手を使ってあれこれと考えながら学習を進めていかなければ、知識と技術を真に我が物にすることなどできないだろう。

これまで何度か言及しているように、作曲に関しては、その場で瞬間瞬間に起こる内的現象を、まるでスケッチするかのような速度で曲にしたいという思いがある。それは速度だけではなく、正確かつ精密である必要がある。例えば、ある人と出会った時に、その人と数分ほど話をし、五感を通じて得られた情報と言語情報から、その人を表す曲を即座にその場で生み出せるようにしたい。

先日に訪れたオスロの中心街の路頭で似顔絵を描く人を見た時に、どのように、その場で曲を即興的に生み出せるようになりたいと強く思った。それは即興的であり、感覚的なだけだが、その背後には精密な理論に裏打ちされた緻密な方法論がなければならない。今はその方法論を習得している時期であり、この時期がどれほど長く険しいものであるか皆目見当がつかないが、そうであってもこの時期を必ず乗り越えて、自由自在な作曲の境地に入りたいと思う。今日の作曲実践もそこに向けたかけがえのない一歩となるだろう。2017/9/7(木)

No.164: Pathological Collective Shadow

Again and again, and again and again. I will continue to shout for the modern society.

The collective shadow in our society is tremendously huge and desperately pathological. It is like a fathomless nightmare.

Why do we give in the shadow? Why don't we confront and heal it?

We need to shed light on the shadow, re-own it, and transform it. In order to do so, we definitely need our voices that arise from the depth of our existence. Sunday, 9/10/2017

1519. 繙承と伝承

昨日は、学術研究と作曲実践に集中して打ち込んでいたため、気づけば振り返りの時間あまり設けていなかった。珍しく日記を書く分量も少なかった。

昨日は大学のキャンパスに足を運び、「実証的教育学」と「学習理論と教授法」のコースに関する課題論文を印刷していた。今日から数日間は、これらのコースが始まるまでに、できる限り多くの論文を一読しておきたいと思う。

キャンパスから自宅に戻つてみると、一つの郵便物が届けられていた。自宅に着いてから郵便物を開けると、中から出てきたのはフランツ・シューベルトの楽譜だった。

先日、シューベルトが残したピアソナタ全曲の楽譜を購入し、それが無事に到着したのである。この楽譜にはシューベルの未完の作品も収められている。それらの未完の作品の楽譜を眺めた時、自分が作曲を始めようと思い立った歳と同じ年齢でこの世を去ったシューベルトの人生に思いを馳せざるにはいられなかった。シューベルトがこの世を去ったのと同じ年齢の時に作曲を志したのは何かの偶然だろうか。

今、書斎の中では、シューベルトのピアノ曲が静かに流れている。外は早朝から雨に見舞われている。七時を迎えたフローニンゲンの街はまだ暗く、寒空から雨が降りしきる。夜が完全に明けていない中で、雨がガラス窓にぶつかる様子だけがはつきりとわかる。

書斎に流れるシューベルトのピアノ曲は、一時的に過ぎ去っていく雨とは異なり、過ぎ去ることのない流れを本質的に持っていると思った。それこそが、シューベルトという一人の作曲家が辿り着いた普遍性であり、彼の魂は曲の中で生き続けている。

シューベルトの曲を聴きながら、少なくとも作曲にかける意志、そして、創作活動に打ち込んだシューベルトの意志を受け継ぎたいと改めて思う。そうした新たな決意とともに、今日という一日を緩やか

に開始させようと思っていた。しかし、最後にもう一つだけ書き留めておくことがあった。シーベルトの意志を受け継ぐことに関する、ある科学者の意志を受け継ぐことを暗示する夢を昨夜見た。

昨夜の夢の中で、私は元ハーバード大学教育大学院教授のカート・フィッシャーと対話をしていた。フィッシャー教授の研究室で発達研究に関する意見交換を行っていたのである。

フィッシャー教授は終始笑顔で話をしており、その場の雰囲気はとても和やかだった。和やかでありますながらも、非常に充実した会話がしばらく続いた後、フィッシャー教授が突然話題を変えた。

フィッシャー教授:「洋平、うちの大学と一緒に研究をしないか？ 実は来年、私は退職することになっており、大学にいられるのも来年が最後なんだ」

この言葉を聞いた時、とても有り難い申し出に嬉しくなった。その場で私は何と返答したのか覚えていない。だが、その時にフィッシャー教授から自身が執筆した最後の論文を手渡されたのをはっきり覚えている。

フィッシャー教授:「よかつたらこれを一度読んで欲しいんだ」

優しい笑顔とともに、その言葉を発したフィッシャー教授は、科学者としての集大成として書き残した最後の論文を私に手渡した。それを受け取った瞬間、数十ページの紙の論文を遥かに超えた重みを確かに感じた。

何かを託されたのだ、という確かな実感が自分の中でふつふつと湧き上がっていた。手渡された論文をしっかりと握りしめたまま、私は夢から覚めた。

多くを語ることはしない。シーベルトやフィッシャー教授から何かを継承し、それを伝承していくという意志だけが今の自分を根底から支えている。2017/9/8(金)

No.165: A Glorious Day

Today will be a glorious day. I imagine so without any rational reasons.

Logical thoughts do not come first, but somatic senses appear first. That is why I thought that today would be a sublime day.

I used the future tense to describe the splendidness of today. Yet, it is not correct. The precise description is that today is glorious or today is being splendid. Tomorrow will be so. Monday, 9/11/2017

1520. 残酷なまでの解放と自由の中にくつろぐこと

今朝はとにかく寒い。九月に入ってからまだ間もないというのに、今朝はとても寒い。

足元があまりに冷えるため、暖房を入れるか迷うほどであった。さすがに暖房を入れるにはまだ早いだろうと思ったため、とにかく暖かい格好をすることにした。

激しい雨が書斎の窓ガラスを打つ。今日はあいにく一日中雨のようだ。

明日も雨が降るらしい。昨日、数日間分の食料を買ったため、これから数日間は家から一歩も出ずに自分の仕事に打ち込むことになるだろう。

私たちには様々な欲求があるが、中でも「創造欲求」というのは、私たちが日々の生活の中に充実感や幸福感を見出す上で非常に大切なものであるように思える。しかし、現代社会は、こうした創造欲求を私たちに充足させてくれるようには動いていない。実際には、その他の欲求に私たちに向かわせるような、巧妙な仕掛けが随所に存在しているのが現代社会の姿だろう。

現代人の多くが血眼になって充足させようとしている最たるもののが、金銭の獲得と共に謀した偽りの自己実現を求める欲求だろう。現代社会は、実に巧妙な思想的・制度的な枠組みをもってして、私たちにこうした欲求を追いかけるように仕向けてくる。実際に、多くの現代人はその枠組みに気付くことすらなく、盲目的に、決して満たされ得ぬ偽りの自己実現を求めるために駆り立てられている。

これはとても不幸かつ危機的な事態であるように思える。現代経済において、金銭というのは無限に増殖を続ける性質を持っており、さらにはそれは実態を持たない。私たちは実態を持たない無限

に増殖を続けるものを追い求め、それを止めることを一向にしない。満たされ得ぬものを追い求め続けることが疲弊感をもたらすのは当然だろう。

現代人の多くは、この疲弊感に苛まれているように思えて仕方ない。それでいて、その疲弊感を生み出しているものが何なのかが見えていないという二重の不幸を経験しているのだ。この二重の不幸を乗り越えていくためには、少なくとも二つの方法があるようと思える。一つは、こうした不幸を生み出す構造特性に意識を向けることである。

この世界を呪縛する思想的・制度的な枠組みに認識の光を与えることにより、これまでの自分がそうした枠組みを盲目的に信奉していたことにハタと気づかされるだろう。しかしながら、こうした構造特性に気付くことは容易ではない。それほどまでに、この世界の大部分は一つの強力なイデオロギーで支配されていると言える。

この状況において可能な打ち手は、極めて単純だが、こうしたイデオロギーの支配がかろうじて及ばない世界に行き、自分を呪縛する物語とは全く別の物語がこの世界に存在することを見出すことにあるのではないかと思う。

現代社会を呪縛するイデオロギーがかろうじて及ばない世界というのは、物理的な世界のどこかの場所かもしれないし、絵画や音楽、そして文学などの芸術世界の中にある場所である。こうした場所を自分で発見し、そこに自己を晒してみなければ、もはや自己を呪縛する物語に気づけないような世の中になっている気がしてならない。

もう一つの手段は、無限に増殖するものを追い求めることをやめ、自らが何かを創造することを行っていくことである。金銭や情報のように無限に増殖するものを盲目的に追い求め、それらを消費するだけの生活は、間違いなく私たちを疲弊させる。そこには生きる充実感も幸福感もないだろう。

人には誰しも創造欲求なるものがある。私たちは本来、創造することを宿命づけられた生き物だと思うのだ。自分の内側にある意味を見出し、意味を作ることを通じて、この世界に自己の表現物を創造していくこと。こうした創造行為に従事することは、生きる充実感と幸福感を私たちに必ずもたらしてくれるだろう。私たちは創造され、創造することを宿命づけられた生き物なのだ。

無限に増殖するものを追い求め、それらを消費することに躍起になることをやめ、自己を表現しながら創造活動に従事する生き方の先に、残酷なまでの解放が待っているだろう。残酷なまでの自由の中にくつろげるかどうか。生の充実さと幸福さを存分に享受することのできる、残酷なまでの自由さに自己の存在が溶け落ちるほどにくつろげるかどうか。それがこのような現代社会で真に生きていくための肝のように思えて仕方ない。2017/9/8(金)

No.166: Working Memory and Music Composition

I participated in the first class of “Theory of Learning and Instruction” in the morning. This course will solidify my knowledge about learning theories.

The main topic of the today’s class was cognition, especially executive functions. I could rebuild my knowledge about the characteristics of executive functions. What I most felt intriguing is that our working memory is domain specific. The unique nature of working memory is not only holding information in mind but also manipulating it—short-term memory just holds information.

The more we learn or practice, the more we can acquire complex working memory to deal with information more efficiently. However, we should notice that building a sophisticated network of working memory takes time. Once we hasten the process, we will fail to construct a robust network of knowledge. We need to recall Jean-Jacques Rousseau’s insightful assertion that slower is better for our learning.

From my experience of music composition, I can observe that my working memory to compose music becomes more and more efficient in accordance with the accumulation of my practice. Although the progress of my music composition is quite slow, it is not unusual but quite natural in terms of the intrinsic nature of learning.

I will practice composition tonight, taking into consideration the characteristics of executive functions. Monday, 9/11/2017